

## 修士論文題目

Riemann 対称空間上における測地線の簡約部分 Lie 代数への射影に対する有界性  
—低階数・低次元の場合—

氏名: 奥田 堯子

本修士論文では、小林俊行氏による次の  $\mathfrak{h}$  射影の有界性に対する予想 1 を、 $G$  の実階数や  $H$  の次元が低い場合に証明した ( $\mathfrak{h}$  射影の定義や記号は後述する).

予想 1  $Y(\mathbf{R} X)$  is bounded in  $\mathfrak{h} \cap \mathfrak{p} \iff [X_1, X_2] \neq 0$  or  $X_1 = 0$ , である.

ただし  $X = X_1 + X_2$  はベクトル空間としての分解  $\mathfrak{p} = (\mathfrak{p} \cap \mathfrak{h}) \oplus (\mathfrak{p} \cap \mathfrak{h}^\perp)$  に沿った  $X \in \mathfrak{p}$  の分解とする.

この論文の基本設定は以下の通りである.

## 記号と定義

- $G$  を非コンパクト実半単純 Lie 群,  $H$  を  $G$  の Cartan 対合  $\Theta$  に対する非コンパクトな実半単純部分 Lie 群とする.
- $\mathfrak{g} := \text{Lie } G$ ,  $\mathfrak{h} := \text{Lie } H$  とし,  $\mathfrak{g} = \mathfrak{k} \oplus \mathfrak{p}$  を  $\theta := d\Theta$  による Cartan 分解とする.
- $e_G$  を  $G$  の単位元とし,  $o_K := e_G K \in G/K$  とする.
- $B(-, -)$  を  $\mathfrak{g}$  の Killing 形式とし,  $\mathfrak{h}^\perp \cap \mathfrak{p} := \{W \in \mathfrak{p} \mid B(Y, W) = 0, \forall Y \in \mathfrak{h} \cap \mathfrak{p}\}$  とする.

本修士論文の主題である  $X \in \mathfrak{p}$  の  $\mathfrak{h}$  射影  $Y(X) \in \mathfrak{h} \cap \mathfrak{p}$  は、次の定理 2 により  $(Y(X), Z(X)) := \pi^{-1}(e^X \cdot o_K) \in (\mathfrak{h} \cap \mathfrak{p}) \oplus (\mathfrak{h}^\perp \cap \mathfrak{p})$  と定義される.

## 定理 2 [Kob89, Lemma 6.1]

$\pi: (\mathfrak{h} \cap \mathfrak{p}) \oplus (\mathfrak{h}^\perp \cap \mathfrak{p}) \ni (Y, Z) \mapsto e^Y e^Z \cdot o_K \in G/K$  は上への微分同相である.

$Y(X)$  は図形的には、「 $e^X \cdot o_K$  から  $e^{\mathfrak{h} \cap \mathfrak{p}} \cdot o_K$  に下ろした垂線の足」と見ることができ、 $Y(\mathbf{R} X)$  が有界であるか否かという問いは、幾何的には「 $e^{tX} \cdot o_K$  から  $e^{\mathfrak{h} \cap \mathfrak{p}} \cdot o_K$  に下ろした垂線の足の  $t \in \mathbf{R}$  での和集合が有界であるか」という問に対応する.

予想 1 の大本は、実簡約 Lie 群  $G$  とその閉部分群  $H$  に対する  $G$  の正則表現  $L^2(G/H)$  について Plancherel 測度の台を求めることを目標とした [Ber88] にある.

[Ber88] の内容はおおまかには次の通りである;  $G/H$  が  $eH$  を中心とする radial function  $r$  に対して「 $\mathbf{R}^d$  と同じ増大度」を持つとき、 $G/H$  のランクが  $d$  であると言い、 $G$  の既約ユニタリ表現  $V$  が  $L^2(G/H)$  の既約分解に出現する必要条件は、非自明な  $G$ -絡作用素  $\alpha: (C_c(G/H))^\infty \rightarrow V$  が存在し、 $\alpha$  の「双対」を  $\beta: V^\infty \rightarrow C(G/H)^\infty$  とすると、任意の  $v \in V^\infty$ ,  $d' > d$  に対して  $\int_{G/H} |\beta(v)(x)(1+r(x))^{-d/2}|^2 dx < \infty$  なることである.

ここで  $G$  が  $G = KAH$  という Cartan 分解を持つときに、 $G/H$  がランク  $d := \dim A$  となる可能性がある条件の 1 つを  $X \in \mathfrak{a}$  に対する  $\mathfrak{h}$  射影  $Y(\mathbf{R} X)$  の有界性として定式化することができる. これが本修士論文の背景である.\*1

\*1 「」部分は 正確に定式化する予定 2022/01/10

予想 1 の証明方針は  $G = SU(1, 2)$ ,  $H = SO(1, 1)$  (ないし  $G = Sp(1, 2)$ ,  $H = SO(1, 1)$ ) の場合の証明がトイモデルとなっている.

$G = SU(1, 2)$ ,  $H = SO(1, 1)$  の場合の証明は基本的には  $G/K \simeq \{(z_1, z_2) \in \mathbf{C}^2 \mid$

## 参考文献

- [Ber88] J. N. Bernstein, *On the support of Plancherel measure*, J. Geom. Phys., Vol. 5, n. 4, 1988, pp. 663–710
- [Kob89] T. Kobayashi, *Proper action on a homogeneous space of reductive type*, Math. Ann., Vol. 285, Issue. 2, 1989, pp. 249–263.
- [Kob97] T. Kobayashi, *Invariant measures on homogeneous manifolds of reductive type*, J. Reine Angew. Math., Vol. 1997, No. 490–1, 1997, pp. 37–54